

## 等身大で見る

院長 寺園 喜基



学院史を振り返ることは、先達を等身大に引き寄せることでもある。ここで一例として「創立者 C.K. ドージャー先生」について考えてみる。「学院の創立者はドージャー先生である」として、個人の業績を強調すべきではない。そこには多くの人々の祈りと努力があったのである。また先生はしばしば一面的に誇張されたり美化されたりして語られる。その結果、尊敬されはしても親しまれず、遠い存在になってしまう。しかし等身大に引き寄せて見てみると、身近に感じられるのみでなく、かえって偉大さがわかるように思う。

学院創立時において、初代院長は條猪乃彦氏、理事長は J.H. ロウ宣教師であり、ドージャー先生は主事である。また、その前の創立準備の理事会においては、メンバーは宣教師三人、日本人二人であるが、先生は宣教団書記として参加している。そしてそこで初代院長の候補者として挙げられたのは齊藤惣一氏だった。齊藤氏は当時、熊本第五高等学校の教授、熊本バプテスト教会員であった。創立準備理事会の日本人理事の一人でもあったので、初代院長に推されたのは当然だと考えられる。しかし氏はこれを断り、日本 YMCA に転進し、後に国際的に活躍するようになる。『創立三十五周年記念誌』（1951年）に寄稿した「創立当時の思い出」の中で、「愈々開校の運びとなった。しかし、どうしても、適当な日本人の校長が見つからぬ。そこで、最初に私に就任をと云うことになった。今だから、もう差支ないと思うが、…私は相当迷ったが遂に意を決して、上京、YMCA の仕事に献身することとなった。」と述べている。そこで、理事会は熊本県立玉名中学校の教頭の條氏を初代院長として決定したのである。

條院長はしかし、病気のため就任わずか五ヶ月たらずで辞任された。

理事会は後任探しに苦労したという。そして先の齊藤氏、さらに千葉勇五郎氏、坂田裕氏と交渉している。坂田氏との交渉について、熊野清樹牧師が「秘話」を記しているが（『日本バプテスト連盟史』1959年、181頁）、それによると、理事である宣教師の依頼を受けた熊野牧師（当時は神学生）は、東京学院（現在の関東学院）で教師をしていた坂田氏を推薦し、理事会はこれを承認し、本人の内諾を得たという。これを受けて理事会は正式に交渉して本人の了解を得た。ところがこれを知った東京学院の理事長テネー博士が、「諸君はわれわれの手からS氏を奪うつもりか」と言って怒り、この交渉は失敗に帰したとのこと。坂田氏は後に関東学院の院長になる。そこで、理事会はドージャー「主事」を院長に選出した。先生は最初、就任を固辞された。しかし理事会の熱心な要請を拒むことができずついに受託され、ここに第二代院長としてのドージャー先生が生まれることになる。

ところで、「創立者」という呼び方は何処からきたのだろうか。「創立当初の教職員一覧表」（『西南学院七十年史』上巻、279頁）によると、「教師」、「職員」の項目の最後に、「創立者」としてC. K. ドージャーと記されている。これは一九一六年四月のものであるが、それに先立つ二月一五日の県知事の開設認可書はドージャー先生の宛名になっているのである（同278頁）。すると創立者というのは、ドージャー先生が在日宣教団書記として認可申請を提出したからではなかろうか。開校式では主事として祈祷をしており、開校後も主事として働いておられる。

学院の「創立者」ドージャー先生というのは、当初は名目的なものであった。宣教団書記また学院主事としての働きにおいて、そして十二年にわたる第二代院長としての働きにおいて、先生がまさに心血を注いで学院を運営されたという事実が、名目に実体を与えた、と言えないであろうか。